

ラスパルマスからモンテゴベイ（ジャマイカ）までの大西洋は、ホノルルから横浜までの太平洋と同じく、次の寄港地まで一番長い船旅だ。地中海のように2～3日で次の寄港地に着いてしまうのと違って、一番落ちついて船内生活を楽しめる期間といえるかもしれない。しかし海が荒れて船酔いする人が多いところでもある。

午前零時にラスパルマスを出港した船は、大西洋を西へ進む。予想通り船は大揺れで、朝食後は、酔止め薬を飲んでキャビンのベッドでごろごろしていた。昼頃、緊急船内放送が流れた。クルーの中に急病人がでたので、Uターンして、カナリア諸島のイエロ島まで引き返し、ヘリに移して病院へ搬送するという。放送を聞いて8階デッキに上がってみた。左舷に島を見ながら航行していたはずが、右舷に島が見える。バッグにぶら下げて携帯している磁石でも、船首が東を指している。毎朝ラジオ体操や太極拳をする屋上デッキは、立入禁止になっている。ピースボートに乗る前に読んだ西丸與一という人の本を思いだした。彼は船医として、ぱしふいっ

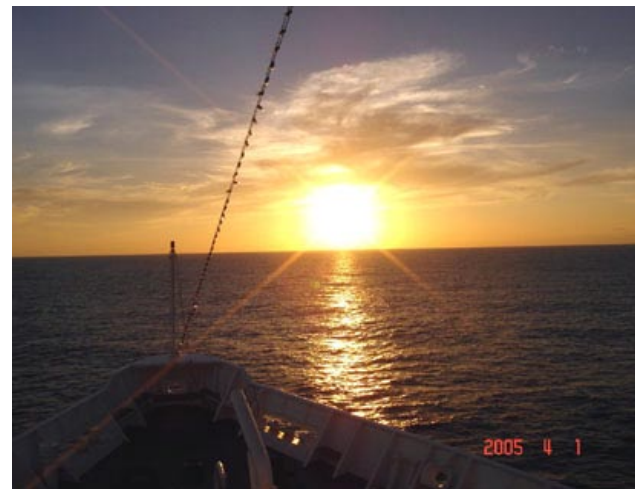
くびいなす（Pacific Venus）に乗船したときのことを、2冊の航海紀に書いている。ニューカレドニアからグアムに向かう洋上での話だ。近くを航行する日本漁船に急病人がでて、その救助依頼を受けて、何時間も逆戻りして、その病人を自分達の船に移して、寄港地の病院へ搬送したという。それは思いがけないクルーズ中のできごとで、そんなことはめったにないことだと書いてあった。今回、私たちも、めったにないできごとで遭遇して、船酔いなどしばし忘れてしまった。右舷デッ

キは、船からヘリに急病人を移す瞬間を見ようと、“やじうま”でいっぱいになった。もちろん私もそのひとりだったが…。イエロ島を過ぎても、まだ救助のヘリは来なかった。1時間くらいはデッキでうろうろしていたが、待ちくたびれて、キャビンにひきあげてしまった。その日は“安息日”で、講座も自主企画もほとんど入っていない。夕食前の5時から、Tさんのキャビンで、寄港地で買い求めた伊、仏、西のワインを持ち寄り、“ワイン

パーティー”をやることになっていた。（再度書き添えておくが、キャビンでの飲食は原則として禁止されている。）何か準備することがあるかもしれないと、早目にTさんのキャビンに行くと、すでに準備はできていて、白ワインは携帯用の洗面器で冷やされ、チーズ、サラミ、ポテトチップス等のつまみまで用意されている。予定の5時にはまだ大分間があったが、Tさんとふたりで一足早く栓を抜いて飲み始めてしまった。その間にもクルー向けの緊急放送が何回も流れてい



ヘリコプターで救助



大西洋に沈む夕日

た。急病人をヘリに移すために、万全の準備が必要なのだろう。5時頃にヘリが来て、急病人を病院へ搬送していったそうだ。船もヘリも止まることなく速度をあわせて進みながら、急病人をヘリに吊り上げたようだ。その様子をデジカメに撮ったKさんが、パソコンの画面で見せてくれた。かなり大掛かりで、緊張する作業だったらしい。残念ながら、その場にはいなかったのだが…。しばらくして、「急病人は無事、病院に搬送されました。乗客の皆さんの協力に感謝します。」という簡単な船内放送が流れたが、それ以外は何も公式には

知らされなかった。その日の午前中、薬をもらうために診療室に行ったKさんは、クルーの診療時間でないにもかかわらず、顔色が非常に悪い男性クルーが、待合室にいたのを見たという。ヘリで運ばれたのは、その男性だろうということになった。それから数日間の船内は、その話題でいっぱいだった。病名は、腹膜炎だとか、心臓発作だとか、仕事に胸部を強打したとか、いろいろな噂が飛び交った。そのあたりから、もしも船内で急死者がでたら、その遺体はどうなるのかという話になった。重石をつけて海に流し水葬にすることはないだろう。船内の焼却炉で火葬ということもないだろう。

ピースボートのリピーターの話では、船内には霊安室があり、柩が3コ用意してあるという。冷凍にして日本まで連れて帰るとのことだ。第46回の旅では船内で2名亡くなったという。推測や噂で話はどんどん広がっていく。船旅の予備知識の無い私はすべて信じてしまいそうだ。前述の西丸ドクターの本には、船内で処置できないほど重篤な場合は（その本の中では、流産と末期がんと心臓発作と急性緑内障だったが）、次の寄港地まで急行し、病院に搬送したり、帰国を促したりした、ということが書いてあったが、船内で亡くなった人のことまでは言及していなかった。単調なはずの大西洋の船旅での、予期しなかったハプニングから、こんな話になってしまった。

あいかわらず大西洋は波が高く船は大揺れだ。逆戻りした遅れを取り戻さんと速度を上げるから、なおさら船が揺れるのか…？4日続けて酔止め薬を服用。レセプションでくれるトラベルミンが効かない人に、自分が持っている酔止め薬を配って、善意のおしつけをしたのもこの頃だった。波は高いが良い天気が続いた。この旅の半分以上が過ぎた53日目の大西洋で、水平線に沈む美しい夕陽を、初めて見る事ができた。船内新聞に載っている日の入りの時刻に合わせて、ほとんど毎日デッキに出ていたが、水平線近くにはいつも雲があって、太陽はその雲の中に入ってしまった。日没にデッキに集う顔見知りの人たちと、「きょうも残念ながらだめでしたね。」などと、言葉を交わしたりもした。ここにきてやっと、最後までき

ちりと水平線に沈む夕陽を、2回も見ることができた。太陽のてっぺんが水平線に隠れた瞬間、歓声が上がって拍手する人もいた。

元気な人は、寸暇を惜しんで企画や講座に参加し、船内生活を満喫している。私の場合はその逆で、ごく限られた2～3の講座に参加する以外は、シアターで映画を見るか、キャビンでごろごろしながらテレビを見るが多くなった。「旅情」、「第三の男」、「慕情」、「エデンの東」、「駅馬車」、「荒野の決闘」などの懐かしい映画をシアターで見たのもこのときである。キャビンのテレビでは、「冬ソナ」を見ながら（聞きながら）昼寝をした。このドラマで流れる音楽は、心地よい眠りを誘う。でも大筋はわかったので、これで日本に帰っても、韓国ドラマの話に入っていけるぞと自信を持った。

夕食時の缶ビールだけではもの足りないと思ったときには、誰かのキャビンでの“宴会”や、居酒屋波へいでちょっと一杯という日が、3日に1度くらいの割合で続いた大西洋だった。

モンテゴベイには予定通りの入港だった。